

第二回国民体育大会に関する研究:  
『大会報告書』と北国毎日新聞から見た石川県民の  
大会への関わり、取り組みに着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 亜弥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/36015">http://hdl.handle.net/2297/36015</a>

## 第二回国民体育大会に関する研究

—『大会報告書』と北国毎日新聞から見た石川県民の大会への関わり、  
取り組みに着目して—

保健体育コース 00-038 清水亜弥

### I、研究の動機

国民体育大会とは、毎年地方持ちまわりで開催されているスポーツ・イベントであり、1946年に第一回大会が京都府を中心に隣接府県で行われてから、現在も続いている。

第二回大会は昭和22年（1947）に石川県で、初の地方開催として行われた。この大会から、火焰の国体マークの制定、記念切手の発行がなされた。また、北陸地方を巡幸中の昭和天皇が巡幸の一環として秋季大会の開会式に出席し、戦後初めて国歌斉唱や国旗掲揚が行われた、という様々な面で初めてづくしの大会であった。

昭和22年の日本は、アメリカの間接統治をうけ、民主化政策が進められていた。そのようななか、スポーツの場面においても、荒んだ国民生活の再建、スポーツの再建、体育界の活性化を背景に、「国民体育大会」が生まれた。

当時の石川県は、戦災を免れたとはいえ、戦災者や引揚者の流入に伴う失業問題、食糧不足や物価の高騰による生活不安で、混乱が続いていた。このような困難な状況下で、第二回国民体育大会は開催された。県民たちは深刻な生活不安の中、全国的なイベントである国民体育大会を受け入れなければならなかったのである。このような背景を持ち、加えて様々な面で初めてづくしであった第二回国民体育大会を追求してみたいと思ったことが本研究に取り組む動機である。

### II、研究の目的

本研究では、①第二回国民体育大会の準備等を含めた経過、当時の石川県内の社会状況を明らかにすること、②大会開催による石川県民の反応や態度、行動を、明らかにすることを目的とする。

### III、研究の方法

本研究の目的である、第二回国民体育大会の準備等を含めた経過、当時の石川県内の社会状況を明らかにするために、大会準備委員会が大会の成功を記録として残すために編集された『第二回国民体育大会報告書』（以下『大会報告書』）、当時の北国毎日新聞、『石川県史』を主な史料として用いる。

二点目の目的である、大会開催による石川県民の反応や態度、行動を、明らかにするために、主として、上記の『大会報告書』、北国毎日新聞、補助史料として『石川県体育協会20年のあゆみ』、『スポーツ石川のあゆみ』などを用いる。

### IV、本論

第二回国民体育大会は、昭和22年に石川県で、初の地方開催として行われた。夏季大会には約1,200名の選手が、秋季大会には約13,000名の選手役員が参加、ともに大会期間中は好天で多くの観客が会場に詰めかけた。初の地方開催ということで、もしも失敗に終われば今後地方での大イベント開催は難しくなるというプレッシャーを抱えながら、

## V、結論

本研究では、①第二回国民体育大会の準備等を含めた経過、当時の石川県内の社会状況を明らかにすること、②大会開催による石川県民の反応や態度、行動を明らかにすることを目的としていた。本研究で明らかになった結果は、それぞれ以下の通りである。

### ①第二回国民体育大会の準備等を含めた経過、当時の石川県内の社会状況について

- ・当時の金沢市長と体育会県支部の各方針が、大会開催によって効果的に進められることが石川県の大会招致決定に大きく影響した。
- ・当時の石川県は、非戦地とはいえ失業問題や食糧・物資不足が深刻で、人々の生活不安が続いていた。
- ・大会施設の工事は、資材難や雪による中断のため難航した。
- ・大会が近づくと、大会開催側はポスターの配布や大会標語の一般募集によって、県民に盛り上がり求めた。

### ②大会開催による石川県民の反応や態度、行動について

- ・「国民体育大会開催」には、多くの県民が、全国から人々が集まることによって物価高騰や食糧不安が高まるのでは、という不安を持った。
- ・大会反対の声が大きくなり、反対運動に発展。大会延期期成同盟も結成される。対する大会開催側は、反対派が心配するような問題は起こらないという主張を貫き、反対派の意見を押し切った。
- ・大会反対派の活動は、昭和22年7月3日の「大会開催正式決定」を受けて出された7月7日の声明をもって終息したものと思われる。
- ・大会開催に便乗して、商店街では、土産品の準備や営業時間延長などで売り上げの増加を狙った。
- ・秋季大会の開会式には天皇が臨場するというので、多くの観衆が会場に詰めかけた。また、天皇臨場に伴い学童のマスゲームが企画されたと推測する。
- ・県民はスポーツ観戦に慣れなかったようで、体育会本部が満足するような応援はできていなかったが、その応援も日毎に選手と観衆が一体となったものへと変わっていった。観衆も大会を通じて、スポーツ観戦の楽しみ方やマナーを学んでいったものと思われる。
- ・大会期間中は、県内の多くの学生が大会補助員として活躍した。運動部員などは審判員や記録員といった競技運営に関わる仕事まで任されていた。

国民体育大会は戦後間もなく誕生し、現在まで半世紀を超えて続いている。昭和62年の第四二回沖縄大会で、大会は全国を一巡し、現在は二巡目となっている。「地方財政への圧迫」「選手強化の過熱」など様々な問題を抱えつつも、大会は日本の体育・スポーツの重要イベントの一つとして全国をまわり続けた。国民体育大会が地方持ちまわりの大会となり得たのも、初の地方開催であった石川での第二回大会が無事終了し、地方でも大会を十分に開催できることを示したからであろう。もしも第二回大会が失敗に終わっていたならば、現在も国民体育大会は都市でしか行われていなかったかもしれない。

初の地方開催ということで、「失敗に終われば今後地方での大イベント開催は難しくなる」というプレッシャーを抱えながら、当時の大会運営に携わった人々は大会の成功

当時の大会運営に携わった人々、特に大会準備委員会の人々は大会成功を目指した。

大会招致は、第一回大会が行われている中で始動した。当時の石川県は、戦災を免れたとはいえ、人々の生活は食糧や物資の不足、失業問題などで混乱していた。そのような中、大日本体育会石川県支部は大会招致を決定した。「石川県の県民性を明朗闊達なものへ導くため」、「積極的にスポーツの奨励によって体位の向上をはかるため」、また、石川県が非戦災地であり、温泉旅館が多く宿泊施設が整っているというのが大会招致理由であった。また、それらの理由に加えて、金沢市長であった武谷氏の「金沢市を文化都市に」という「文化都市建設」の提唱、そして大日本体育会石川県支部における「総合運動場建設」の方針が、大会招致決定に大きく影響したと見られる。「国民体育大会開催」は税金が優遇され、また国から特別補助金が出るため、両立場の方針がより効果的に進められるという判断がなされたと思われる。

幾度となく大日本体育会との談合を繰り返した末、石川県での大会開催が昭和22年7月3日に正式決定した。決定にこぎ着くまでには多大な苦難があった。施設の工事は冬の間中、雪のためにストップし、体育会本部の方からは、「本当に石川県で全国規模の大会を開催できるのか」という疑問が上がった。また、石川県民からも大会開催に疑問を持つ声があがり、大会反対運動にまで発展した。

商店街や歓楽街の人々が大会開催を歓迎する一方で、大会による人々の流入により、物価上昇や食糧不安が高まるのでは、と大会開催を危ぶむ声もあがり、大会反対運動が起こった。対する大会開催側は、反対派が言うような問題は起こらないという主張を押し切り、大会準備を進め大会開催を迎えた。

夏季大会は昭和22年8月22日から24日までの3日間にわたって行われた。大会開催側は、夏季大会に向けてポスターを配布したり、標語を一般から募集したりと大会開催に向けて県民に盛り上がりを促した。商店街では、大会に便乗して土産品を用意し、大会期間中は営業時間を延長して、売り上げの増大を狙った。また、県外から続々と現れる選手たちのために、金沢駅には案内所が設けられ、その対応に石川県内の学生が動員された。大会期間中は多くの人々が松任プールに押し寄せた。特に決勝が多い第三日目には、期間中最高の人々の入りを記録した。

秋季大会は昭和22年10月30日から11月3日までの5日間にわたって行われた。秋季大会には開会式に天皇が臨場するというので、見目を良くするため県内の学童たちによるマスゲームも企画された。また、夏季大会同様に商店街では客寄せのための準備で盛り上がった。大会期間中は天候が心配されたが、5日間とも好天で、陸上競技、野球など21競技とフェンシングなど3種目の公開競技が滞りなく行われた。開会式は天皇が臨席するということもあり、多くの観衆が詰めかけた。秋季大会でも県内の学生が補助役員として、様々な面で活躍しており、大会運営に欠かせない存在となっていた。宿舎や輸送の面で選手からクレームがでたものの、これといって大きな問題は起こらず、大会は無事終了した。

大会に対する反省は多く残ったが、全体的に見れば第二回大会は成功を収めたというのが、関係者による大方の見方であった。大会終了後、大会により残された施設の活用のため、また県内スポーツのますますの発展のため、石川県では体育協会が設立された。

を目指した。「大会運営に携わった人々」というのは、大会準備委員会などの人々だけでなく、観衆として会場に押し寄せた人、補助員として大会に参加した人など、大会に関わった全ての人のことである。それらの人の中には、当初大会に反対していた人もいたかもしれない。もちろん、あくまで大会反対を貫き通して大会に関わらないでいようとした人も、県民の中にはいたかもしれないが、そのような人たちも含めて、石川県での全国的な大イベント成功は、当時の全ての県民に誇りを与えたのではないだろうか。

先にも述べたように、現在の国民体育大会には様々な問題がつきまとい、その存在意義さえあやふやになりつつある。「うまくやれなくてもやろう」という大会当初の姿勢を、今日の大会は学ばなければならないのではないだろうか。

## VI, 今後の課題

本研究においては、今後の課題として以下のことが挙げられる。

一点目としては、当時の他の新聞の分析である。本研究では北国毎日新聞のみを扱ったが、他の新聞を分析を加えれば更に、当時の大会や県民についての様子が詳しく伺えると考ええる。

二点目として、第二回大会以外の国民体育大会の分析を加えることである。本研究では第二回大会の分析に止まったが、他大会の分析を加えることによって、他県開催大会との類似性や第二回大会ならではの独自性が明らかになり、第二回大会の様子がより明確に浮かびあがると考えられる。

三点目としては、大会を経験した県民に、大会についてのインタビューをすることである。大会を経験した人々からの話が加われば、当時の様子をより鮮明にすることができると考える。今後、これらの分析も加える必要があると考える。

### 〈主要参考文献〉

- 第二回国民体育大会石川県準備委員会編（1948）『第二回国民体育大会報告書』
- 石川県史編集委員会（1964）『石川県史 現代編（3）』
- 石川県体育協会20年のあゆみ編集委員会（1968）『石川県体育協会20年のあゆみ』
- 創立50周年記念史編集部会編『大地揺るがす感動・スポーツ石川のあゆみ：財団法人石川県体育協会創立50周年記念史』石川県体育協会